

令和七年蒼天句会

「今月の一句」集

栗原公子

山眠る老いたる村を深く抱き
春立つやアボカドの種ぽんと抜け
雪柳抜け道狭くなりけり
古き靴ふるき私を捨てて春
高く漕ぐぶらんこ挫折まだ知らず
紫陽花やパレットに溶く縹色
掛け算の初め二の段さくらんぼ
涼しさや心にあまるものは捨て
秋雨や炎の長き和蠟燭
八十年続きし平和今年米
浅草にしぐれ煮を買ふ冬隣
山羊の仔のまつげは真白風花す

新井婦紗子

とぐる巻き舌を出したる賀状受く
部屋深く届く陽射しや浅き春
囀りの舞台は大樹空蒼し
花の宴場所取りに置く石三つ
野の色の濃き日溜りや夏隣
花菖蒲江戸紫の立ち姿
母を待つ声賑やかに雀の巢
麦藁帽押さええて仰ぐ観覧車
長き夜未知なる旅へ地図開く
新米やもう一度みる水加減
片時雨昭和レトロな喫茶店
よろめくも転ぶも可笑し木の実独楽

上野賢一

終い告ぐ濃墨の美しき年賀状
笠雲のかかる富士山春浅し
春一番ゆれる手のひら第二ボタン

花辛夷園児の行進声高し
能登の田にそそぐ水音夏近し
異常なし病窓越しの五月富士
おつしよいと博多山笠かけまわし
涼風や句碑を辿りて偕樂園
名残惜しき秋の土佐路やほいたらね
かたむくる箱に小さき手赤い羽根
ゆれるトロツコ窓越しの時雨虹
小春空表彰台に金の手話

江戸繁一

毛筆の衰え知らぬ師の賀状
春浅き終着駅の吹き溜まり
囀りや森のチャペルの道すがら
雪稜に向かつて凜と花辛夷
竹林に銀輪の列夏隣
薫風や声振り絞り応援歌
さくらんぼ日に日に遠くなる故郷

道すがら音なく上がる遠花火
長き夜や友と明日発つ旅支度
新米やどんと積まれし道の駅
しぐるるや峠の茶屋の昼灯り
竹林を抜けて小春の入日かな

大西孝志

想ひ出は消えず真冬の昼の月
孫連れて来たる倅とおでん鍋
ディスプレイに浮ぶ指紋や養花天
たんぽぽや健康遊具のある広場
ふるさとや八十八夜の雨匂ふ
国引きの神話の浜や風薫る
兄妹のセピアの写真さくらんぼ
大ききの順にサンダル海の家
階下より笑ひ声する夜長かな
干拓の歴史ひもとく稲の秋
草の実や人より速き犬の老い
寒暁や祈りのさまに風の塔

北 洋一

轉や離郷の列車待つホーム
清純なうちに早や散れ花辛夷
しがらみのシャツ脱ぎにけり夏隣
朋逝きし遠き故郷新樹光
開け放しよりも気の張る網戸かな
単発の紺の大輪揚花火
入道雲海の底から仁王立ち
新米や一升枡に坐りよき
集落の運動会や豊の秋
幸せの日持ち束の間冬茜

近藤信江

年賀状切手シートの当たり年
うぐいす餅ワークショップの人の列
宙よりの小さなギフト轉れり
退院の日や鳥引くを見送りて

チュウリップ赤白黄色祝祭日
また一つ木の名おぼえし麦の秋
朗読の声すがすがし夏椿
蝉時雨ピクリとうごく犬の耳
人はみな恙のありて秋彼岸
蔦紅葉調子はずれのリコーダー
色も香も吸いこまれゆく夕時雨
月さし来ひざに零るるクロワッサン

佐々木静江

初日待つ銀から金へ水平線
のどけしや玻璃戸に映る空の青
轉りを探る窓辺や朝まだき
黄金に揺れるミモザや日矢の中
人憩ふビルの谷間の若葉風
家並みに万緑迫る木曾路かな
万緑や光る湯殿に四肢とけて
海望むデッキで乾杯遠花火

長き夜や深き闇ある読書灯
水鏡静けさ映す良夜かな
しぐるるや梵鐘響く鹿の町
野の花を活けて朝餉の寒卯

柴 鎮夫

冬ざるる遺影の考は八つ下
魁けて寒紅梅の二三輪
歳問えば指三本や春日和
小上がりの框に杖や桜餅
夜桜に恋の予感や風渡る
慎ましく山紫陽花や雨の島
聞く振りの夫の正論夏の夕
秋暑し「砂の器」と「点と線」
栞紐使わぬままの夜長かな
行年は年下ばかり墓洗う
二番子まで連れて長旅秋燕
年の瀬や妻を二度見の割烹着

下嶋国祥

浦安へ辛夷に合いに句帳下げ
日射し濃きベンチに座る夏隣
睡蓮の合ひ間合ひ間に亀の浮く
さくらんぼ盛り美しきさあ食べよ
蒼空に煙の木霊昼花火
夜半の秋書き物長く楽しめり
早稲の飯少なめに盛る齡かな
小流れに透ける魚影や小六月

菅 隆彦

奥能登の岸边風舞う波の花
藁帽子の中に鎮座の寒牡丹
河口湖の桜隣りに遠見富士
お堀端風に煽られ花筏
バカンスの行き先決める夏隣り
峡谷のトロツコ抜ける風五月

鳶 円舞夏の山並み潮の風
能登復興キリコ先立て祭来る
山麓がこきあ紅葉に染まる富士
暁光や川鶺鴒の飛列絶え間なく
七里ヶ浜江の島の先雪の富士
年の瀬の仲店通り千支飾る

外園重子

月冴ゆる興亡ありし城の跡
弔問の帰路を灯せり白椿
春愁ひ一本指でひくピアノ
陽炎や遠い記憶の縄電車
天平の塔や薨や風薫る
派手かしら我が身に問うて衣更ふ
海の日や写真の兄は学徒兵
隅田川橋を連ねて大花火
登高や空に帽子を投げてみる
踊りの輪月の城下を練りゆけり

時雨るるや言はずに帰る恨み言
深川や時雨かけたる清洲橋

三浦紹子

母百寿まだまだ元気と賀状来る
三番瀬の波の煌めき春浅し
鶺鴒の鳴き声真似て杣の道
銀輪で下る坂下花こぶし
あの頃は父母がいて昭和の日
薫風やお散歩カートの幼児達
幸ちゃん恋バナしたねさくらんぼ
対岸の二ヶ所はなやぐ遠花火
炎帝が親しき友を連れ去りぬ
菊の香や古墳の脇の小さき墓地
諏訪の湖蕭条として夕時雨
末枯れしメタセコイアの並木路

宮崎晴代

ここまでを花野とさだめ道戻る
新米の香りひときは塩むすび
句に溶けて整ふ思ひ冬初め
出迎への足音たたたクリスマス

茂原朱美

罇やみんな長生きする積り
薫風やいつか出て来る捜しもの
よくそろふ双子の返事さくらんぼ
新橋や男の日傘華やかに
秋灯や時折うなる室外機
待つことを楽しむ齡竹の春
読み返す句集にひかり十三夜
小春日や抓んで引いて耳のツボ

和田久恵

今年また出せど戻らぬ年賀状
月毎に来る鉢の花春つれて
観梅の丘ゆるやかに香り来る
春夕焼けもうろう体の東京湾
むせ返る花の香の道夏近し
地下道を抜けて若葉よ箏の会
気まぐれの雷雨に惑うお買物
川風に二人よりそう遠花火
長き夜の眠りは深し転居あと
中庭のきゃしゃなる木々に秋の色
秋晴れやきらら川波海向きて
引越の家具の置き換えはや師走